

日中新時代をめぐる動き

執行役員コンサルティング事業本部副本部長

此本臣吾



2007年は、日中国交正常化35周年であると同時に盧溝橋事件70周年でもある。つまり、日中戦争勃発から今に至る70年を振り返ると、敵対的関係と友好的関係の期間が、ちょうど同じになったということになる。

戦争状態を終結させ国交を正常化させると発表した1972年の日中共同声明の調印当時は、国際冷戦下にあり、旧ソビエト連邦（ソ連）との緊張を強いられていた中国には、日米と友好関係を築きたい動機があった。また、中国にとって当時の日本は、経済発展の学ぶべき模範でもあった。今ならインターネットなどでの一定の世論形成があるが、当時の中国ではそうした国民の政治参加はなく、毛沢東の指導力で国交正常化は一気に実現した。

1970年代から80年代にかけては「日中蜜月時代」といわれる友好関係が続いた。中国は日本に学び、日本はODA（政府開発援助）を供与する。後れている中国経済が発展することは明らかに日本の国益にかなうという点で、両国関係の図式は単純でもあった。蜜月時代は1992年の天皇訪中でピークを迎え、その後、両国関係はぎくしゃくし始める。

1994年には台湾問題、翌年可決した戦後50年決議、一方の中国は、愛国主義教育実施綱領を発表と、両国にとってデリケートな話題が出始める。1998年の江沢民の訪日は、歴史問題という原則を強調するスタイルが反感を呼び、両国関係は緊張化した。さらに2001年以降は首脳同士の会話すらなくなり「政冷（経熱）」の事態に至ってしまう。

1990年代を考えると、日中友好を支えていた2つの重要な要因に変化があった。すなわ

ち冷戦の終結で旧ソ連の脅威がなくなり、両国の経済力も接近し日本の重要性も薄れた。また、日中ともに指導者の世代交代があった。国交正常化を指導した毛沢東、周恩来はもとより、鄧小平もいなくなり、日本側も中国と深い関係を持つ政治家が少なくなった。

さらに2001年からの関係悪化は、インターネット上での情報や両国メディアを通じた国民レベルでの相互不信の影響も大きかった。

そうしたなかでの2006年10月の安倍晋三首相の訪中は大変に意義深いものであった。胡锦涛国家主席との「戦略的互惠関係」での合意は、これからの日中関係の有り様を指し示すものとして重要な合意といえる。

戦略的互惠とは、双方の利益の所在をまず明確にして、何かを得ようとすれば何かを与えるというように、「戦略的」に妥協を図る——すなわち、すべての面で利益は一致しなくとも、合意できる「互惠」が成立する範囲から事を始めようということである。共通する利益だけでなく、もっと広い範囲で両国の利益を議論するということである。

日本にとっては、国連の安全保障理事会改革、北朝鮮の非核化、アジアでの経済協力体制、中国市場での日本企業の成功など、中国の理解を必要とするテーマがいくつもある。一方で中国も、北京五輪の成功、環境保全対策、エネルギー問題など、やはり日本の協力を必要とすることが多くある。両国の利害がすべてにおいて一致するものではない以上、それぞれの利益をまずは理解し合う、戦略的な発想が大切である。これからの日中関係は「喧嘩もすれば協力もする」という成熟した

関係を目指すということではないかと思う。

その一方で、日中の関係の基礎は相変わらずきわめてもろい。たとえば、両国民の反中、反日意識はむしろ高まっており、残念ながら日中両国民の相互理解は進んでいない。

内閣府による外交に関する世論調査を見ると、中国に親しみを感じるという比率は2003年までは5割近くを維持していたが、それ以降、急落して現在は3割程度にとどまっている。一方、中国の世論調査でも、日本に親しみを感じるという比率は1割以下で、5割以上が親しみを感じないと回答している。

ナショナリズムが日中双方で台頭している。双方の利益が異なることと敵対的であることは全く違う。相互理解を深めるための人的交流をいっそう強化する必要がある。

ところで、これからの日中両国は、アジアの大国として日中間だけではなく、アジア全体の利益を考える責任がある。「日本のための」「中国のための」ではなく、「アジアのための」利益を考えるという発想が求められる。そのために、将来を担う日中の若い人たちへの教育、あるいは日中以外を含めた「アジア大」での若い人たちの交流を促進し、国を超えた思考力を養う必要がある。このようにアジア共通の利益と、そこでの日中の役割を考えていくことが、両国のナショナリズムを超えるためにも必要ではないかと思う。

葛藤が多い日中が協力し合うのは容易ではないが、悲観する必要もない。両国がアジア共通の利益のために働こうという意思を持ち続けられれば、やがて雰囲気は変わるはずである。

(このもとしんご)